

「新聞への意見投稿」 平成28年度1・2学期掲載文の紹介

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成28年5月9日（月）掲載

私の世界を広げた時間 1年女子

「よろしくね」。いろいろな場所からそんな声が聞こえてくる。この声は、入学式を終えたこれからの仲間が新しい一歩を踏み出している証しだった。でも私はその一歩をなかなか踏み出せなかった。そんな私の背中を押してくれたのが、「話し合い」の時間だった。

あることについて話し合うというテーマが出た時、正直「最悪だ」と思った。周りは話したことがない人ばかりだし、いきなり話せと言われても自分から話すことができないからだ。でも実際は最初に話題を振ってくれた子がいて、それを支えてくれた子がいて、とても話しやすかった。その時、私はあることに気が付いた。コミュニケーションをとることは人が生きていく上で一番大切で、人の重要な宝物であることに。

この経験があったから今の私がいると思う。やっぱり人と人は言葉がないと通じ合えない。その通じ合う一声をかけることが、つながりや世界を広げるための「カギ」になると改めて実感することができた。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成28年5月16日（月）掲載

すぐに緊張解けた中学校生活 1年男子

「とうとうこの日が来た」。不安だった中学校の入学式当日、僕はこんなふうに思っていました。クラス名簿を見ると、同じ小学校だった子にくわえて、名前に聞き覚えがある子、保育園でいっしょだったけれど小学校が別の子もいました。しかし、入学式の日には緊張し、知らない子とは何も話せませんでした。

翌日、学校のチャイムが鳴ったとき、僕は中学校生活の第一歩を踏み出したような気がしました。そして自己紹介の時間があり、僕と同じ鉄道好きの子がいて、本当に良かったです。

班長、副班長決めもあり、班ごとに話し合いました。最初はだれもしゃべりませんでした。が、「どうする？」というだれかの一言でうちとけ合い、話がはずみうれしかったです。

今ではクラスメートに気軽に話しかけることができるようになり、どんどん友達ができ、毎日学校に行くことが楽しみにになりました。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成28年5月16日（月）掲載

命一つだから味わい深い人生 2年女子

「命が二つあったら」という授業を受けた。

授業中は、二つあった命が一つしかなくなってしまったら、あせってもう一つの命を大切にしている人がいると思っていた。だが、思い返してみると、やっぱり違う気がする。命が一つだからこそ、人生に喜びがあり、悲しみがあり、成長があり、後悔があるのだと思う。やり直せる人生があるなら、みんな何をするかわからない。昨日、祖父がなくなった。一つの命が消えてしまった。祖父がいなかったら、私の母もこの世に生まれていない。つむいできてくれた命に感謝して、私は、今を強く生きていたいと思う。もし命が二つあったら、こんなことは考えもしないだろう。やり直しがきかないと思うからこそ人生は味わい深いのだと思う。命が一つしかない私たちにしかできないこと。それは、他人を思いやり私たちが未来を大切にすることではないのだろうか。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成28年6月7日（火）掲載

「明るい色」の言葉を使いたい 2年女子

「切り替えて」「まだまだ跳べるよ」。運動会の大縄跳びの練習の時、自分の言葉に驚いた。1年前のきつい言葉を言う自分ではなく、温かい優しい言葉を言う自分がいたからだ。

私は思ったことをストレートに言う癖があり、友達を傷つけてしまっていた。そういう自分が嫌いだった。きつい言葉を発した後は気持ちがブルーだった。違う言い方なら相手を傷つけずに済んだのにと悔やんだ。しかしあの時はオレンジ色の気持ちになった。

気が付いた。言葉には、色があるということに。

明るい色の言葉をしゃべれば心も明るくなり、暗い色の言葉なら心も暗くなる。何より、明るい色の言葉が増えるほどクラスの団結力がアップしていく。

言葉は人と人をつなぎ、つながった人たちを正しい道へ連れて行ってくれる。正しい道は、言葉の色が決めてくれる。どの色になるかは私たちの口から出る言葉によって決められる。今年の運動会では、言葉の大切さを知ることができた。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成28年9月19日（月）掲載

歴史から人の生き方を学ぶ 3年男子

歴史というと年号や出来事の暗記ばかりで、果たして学ぶ意味なんてあるのだろうか。つい最近まで僕はそう思っていた。しかし、その考えは変わった。きっかけは、NHKの大河ドラマ「真田丸」を見るようになったことだ。興味を持って深く歴史を見つめると、陰謀やらロマンが渦巻いていることがわかった。

触発された僕は、坂本龍馬と織田信長の伝記を読んでみた。気楽に読みたかったのですが、漫画本を選んだのだが、内容は濃く、面白くて読み始めたら止まらなかった。龍馬からは、反対されても自分の信念を最後まで貫き通す意志の強さを学んだ。信長からは、自分の利益だけ考えて物事を強引に進めていくと、最後の最後には人がついてこないことを学んだ。

人の生き方を探るという視点で歴史を学ぶと、これからの生活に生かせる知恵が見えてくる気がする。次はペリーの伝記を、漫画ではなく普通の本で読んでみたい。

※ 東京新聞「若者の声」 平成28年9月21日（水）掲載

歴史を学んで自分を見つめる 3年女子

歴史はどこからどこまでを指すのだろうか。私が考える歴史は人類が誕生するずっと前から、今生きている1秒前までだと考える。だとしたら、私は歴史を学ぶことに意味があると考えます。なぜなら、今この瞬間もどんどん時代は変わっていて、新しい歴史がつけられているからだ。

過去を振り返ることは昔の自分を知るチャンスになる。もちろん、自分の生まれる前も歴史なのだから、昔の出来事を知ることができる。歴史を知ることによって新しい自分や物事を見つけることができる。

もし、考え方が間違っているとしても新しい何かにつながると考えるとおもしろい。昔が今、そして未来を変えていくのだろう。もしかしたら、歴史は身近にある「宝庫」なのかもしれない。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成28年9月28日（水）掲載

寺院で職場体験 2年男子

普通は、職場体験というとコンビニやファミレス、幼稚園などが思い当たります。でも僕は、お寺を選びました。仏教にも興味があったため、今回、お寺へ体験に行ったのです。

仕事の内容は、基本的には掃除です。初日は、墓地の掃除をしました。落ち葉を集め、線香の灰を掃除し、最後に花入れに入った雨水を全て抜きました。

二日目は、卒塔婆の裏書きを体験しました。字が下手でも、心を込めればよいと言われました。板に書くのはとても難しく苦労しました。僕たちが書いた卒塔婆は、水子さんたちのものでした。水子さんというのは、生まれてすぐに亡くなってしまったり、おなかの中にいたときに亡くなってしまったりした赤ちゃんのことです。みんなで、頑張って書きました。

最終日は、港区にある大きなお寺に行ってきました。午後は、初日のように墓地の掃除をしました。一日目とはまた別の気持ちで掃除をし、心を込めてやりました。本当によかったと思いました。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成28年9月29日（木）掲載

保育体験で学んだこと 2年女子

私が、保育園を職場体験先に選んだ理由は、小さい子が好きだからだ。

楽しいだろうなと思っていた。しかし、それは私の勝手なイメージで、本当はとても体力を使い、気も遣う大変な職業だった。おもちゃの取り合いで、2人同時に泣いてしまったときは本当に困った。昼寝後におむつを替えなくてはいけなくて大忙しだった。勉強になったことも多い。年齢の異なる園児が交流することで、新しい言葉を覚え、コミュニケーション能力が高まるのだなと思った。自分ができないことを、先生にやってもらうのではなく、年が違いうちにやってもらうことで、それぞれの成長につなげることも学んだ。将来、どんな仕事を選ぶかは分からないが、選択肢の中に保育士が入っている。好きなことが仕事になれば良いが、そうではないこともあるだろう。でも苦手なことも嫌がらずに体験すれば一歩前に進むことも学べた。保育園で職場体験ができてとても感謝している。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成28年10月3日（月）掲載

職場体験で働く喜びを知る 2年女子

職場体験学習で、ハンバーガーショップに行った。店の方はみんな優しく、不安ばかりの私に一つ一つ丁寧に教えてくださった。

初日はあいさつなど基本的なことを教わったが、とっさに声が出なかった。二日目と三日目は少し慣れたが、メニューの名前を忘れたり、商品を届けるテーブルを間違えたり、失敗も多かった。でも「ありがとう」「ごちそうさま」と声をかけてくれるお客さんがいてとてもうれしかった。

私は今まで「働く」ということに対する認識があいまいで、深く考えもしなかった。しかし、3日間の職場体験を通して、「働く」ということは苦労や悔しい思いをすることもありますが、それを乗り越えたときの達成感を知ることができるものだとなった。

今回は「中学生だから」と許されたこともあったと思う。この体験を生かし、自分に足りないことと向き合い、社会人になるまでにたくさんのことを学んでおきたい。

※ 東京新聞「若者の声」 平成28年10月5日（水）掲載

職場体験して親の苦労思う 2年男子

総合の授業で本駒込図書館に職場体験に行き、二つのことを感じました。

一つは、仕事量の多さと大変さ。本が膨大にありました。本を返却するときの仕事は3人がかりでやりましたが、多くの人がやってくるので、元の場所に戻しても返却の本が減る気配が全くありません。他に、破れたり壊れたりしている本を直す仕事もしました。図書館の人に聞くと、1日に約30冊もの本が壊れてしまっているとのことで、僕はこれから、今以上に本を丁寧に扱おうと思いました。

二つ目はお金の大切さ。体験中はいつもの何倍も体力を使い、精神的にきつい思いをしました。毎日仕事をしている父や母は常にこれくらい頑張っていて、僕らが生活するお金が生まれるのだと感じました。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成28年10月13日（木）掲載

移動教室で学んだ友情と協力 1年女子

私は、ハケ岳の移動教室に行って学んだことがいくつかあります。その一つが友情と協力の心です。

山登りの時のことです。私は体力があるわけではなく、運動神経も皆無に等しいのです。だから、登って1時間もたないうちに疲れてしまいました。だけど、私は登り切りました。今考えると、一緒に登ったみんなのおかげだと思います。「しんどい」と一緒にグチり合ったり、「がんばって」と友達と励まし支え合ったりしました。だから、私のつらい体は、がんばろうと思い、山を登り切れたのだと思います。

ハケ岳の生活全体でも同じことを感じました。ウォークラリーの時も、食事の準備の時も、ナイトハイクの時も、参加者全員で協力したからこそ、楽しく過ごせたと思います。

移動教室での友情は見せかけやきれいごとではありません。私は心底、友情と協力の大切さを感じました。

※ 東京新聞「若者の声」 平成28年10月19日（水）掲載

園児に学んだ働く意義 2年女子

授業での職場体験の前に、風邪をひいてしまったため、たった1日だけの体験になってしまったけれど、近くの幼稚園に行き、たくさんのことを学んだ。

園児が登園し、全員そろった。クラスになじむのはなかなか難しいと思っていたら、女の子が話しかけてくれた。私はこれだけですごくうれしくて、やっと一歩踏み出すことができたと思った。その子としばらく遊んでいると、どんどん他の子が集まってきて、気付いたら男女関係なくたくさんの子がいた。最初の女の子のおかげで、たくさんの子と仲良くなることができた。

お弁当の時間は、その子と隣どうして食べた。そのとき前にいた男の子が私を指さして、「嫌い」と言った。ああ、やっぱりこういう子もいるよな、と思い、適当に笑ってごまかした。でも、お弁当のあとにはその男の子とも一緒に遊んだ。

帰りの時間になり、親の迎えを待った。迎えが来た子から帰り始める。その様子を、私はただ立って見ていた。すると最初の女の子が、お母さんと一緒に私のところに来た。「ばいばい。ありがとう」笑顔で御礼を言ってきてくれた。お礼を言うのはこっちなのに。こちらこそって、笑顔で見送ると、「嫌い」と言っていた男の子が来た。「また来てね。ばいばい」お弁当のときは嫌いって言っていたのに。

充実すぎて、あっという間の1日だった。働くって、人のためだけでなく、自分のためでもあるんだなって思った。

※ 東京新聞「若者の声」 平成28年10月19日（水）掲載

演劇から学ぶ 仲間信じる力 2年女子

演劇「チャージ」は私に教えてくれた。人を信じ、支え合うということは「人を認める」ことであると。学校の演劇鑑賞教室で劇団「銅鑼（どら）」の劇を見た。個々の多様な考えを持つ人々が意見を出し合い、ぶつかり合う濃い人間ドラマである。家族を守るため、生きていくため、働く理由はそれぞれだが、何より仕事と信頼できる仲間に誇りを持ち続ける登場人物たちの姿に心動かされた。自分にも自信を持てるくらい仲間を信じ、高め合っていきたい。私は今、自分のクラスが好きだ。「チャージ」を見て、仲間を信じる思いがさらに磨かれた気がする。これからもっとみんなと認め合い、切磋琢磨し、補い合っていこう。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成28年10月31日（月）掲載

パラリンピアンンの底力体感 1年女子

車いすテニスでアトランタ、シドニー、アテネ、北京のパラリンピック4大会に出場した大前千代子さんが先日、私が通う中学校で実技披露と講演をしてくださった。テニス部員の私は、大前さんのラリーの相手をさせていただいたが、そのプレーのすごさに驚いた。車いすというハンディがありながら、びしばしと鋭いボールを返す姿に圧倒された。若々しくて、とても60歳とは思えなかった。大前さんは、車いすテニスを始める前はアーチェリーや陸上競技でも活躍し、パラリンピックで金メダルも獲得されている。講演では「障害者差別をはね返そうと、その一心で頑張り続けた。何事にも前向きに取り組み、それが自信につながり、自信が自分をかえてくれた」とおっしゃっていた。テニス部員には「最初から上手な人はいない」と、努力の大切さを説かれた。私もテニスに限らず、どんなことにも努力を重ねたい。

※ 東京新聞「若者の声」 平成28年11月2日（水）掲載

車いすテニス 難しさを実感 1年女子

「夢・未来」プロジェクトの授業で、パラリンピアンンの車いすテニス、大前千代子さんが学校に来てくださいました。テニス部の人が大前さんとテニスをしたり、競技用車いすに乗っているのを見て、車いすテニスの選手は本当にすごいと思いました。足が使えない分、腕で車いすを動かし、ラケットで打ち合うことはとても難しいと思います。また、大前さんの歩んできた人生について知ることができました。自分の課題と向き合って努力する大前さんに強く心打たれました。病気で動かなくなった足とともに生きていくことでついた精神力は、努力して乗り越えたものです。大前さんの願いどおり、4年後にはパラリンピックにも興味をもつ人が増えるといいなと思います。

※ 東京新聞「若者の声」 平成28年11月16日（水）掲載

クラスが一丸 最高の合唱に 1年女子

初めての合唱コンクールがあった。それぞれのクラスの合唱を聞き、それぞれの展示を見る。合唱も展示も、とても素晴らしくワクワクした。自分たちの出番になるととても緊張した。なにせ1学期から歌の練習をしていたのだ。ついに本番となるとやはり緊張するものだ。合唱曲「心の瞳」の練習を始めてすぐは、アルトなのにソプラノしか覚えられなくて、いいかげんに歌ったこともあった。アルトの人たちと協力して練習したことで、ソプラノにつられずに歌うことができた。そして、今までの成果を出し切り、みごと金賞をとることができた。金賞をとれたのはもちろん、何よりクラスの人たちと協力できたことが本当にうれしかった。とても思い出に残る合唱だった。